

「金のなる木」

徳川家康(1543-1616)の有名なエピソードに「金のなる木」がある。「鳴かぬなら、鳴くまで待とう時鳥」と言ったと伝えられる家康の言葉としては意外な感じもするが、この言葉は、家康の教えとして語りつがれている。

江戸時代後期の文人画家中林竹洞(1776-1853)が、世話になった豪商の求めに応じて描いた作品に「金のなる木の図」がある(参考図、個人蔵)。この絵の賛を読みながら、この家康のエピソードを簡単に記述してみよう。

ある時、徳川家康が、周囲に仕える小姓たちに「金のなる木」というものを知っているかと問うたところ、誰も知らなかった。そこで家康は「幹三本の木」を描いて、「是を常々信用する時ハ必富貴を得るなり」と言ったという。その三本の幹は「よろづ程よ木」(よろづ程良き)「慈悲ふか木」(慈悲深き)「しやうち木」(正直)であった。すると、そばにいた細川三斎が、左右にこんな枝を加えたいかがでしょうかと言って、「あさお木」(朝起き)「いさきよ木」(潔き)「しんはうつよ木」(辛抱強き)「ゆたんな木」(油断なき)「かせ木」(稼ぎ)「ついでな木」(費えのなき)「やうしやうよ木」(養生良き)「かないむつまじ木」(家内睦まじき)を加えた。家康は一段とすばらしいものになったと大いに喜び、周囲の人びとに、それぞれ写し取って家の者にも伝えよと話した。

実際に描かれているのは、中央に太い幹のように「よろづ程よ木」「慈悲ふか木」「しやうち木」とあり、そこから「あさお木」などが枝となって伸び、その枝には花とともに葉のかわりに小判が描かれている。

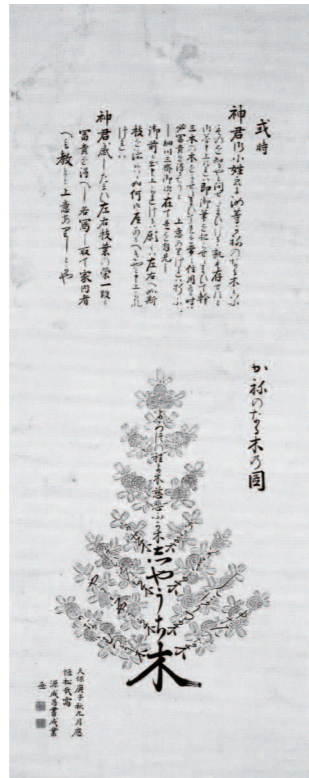
これは「人生は重荷を背負うて坂道を行くが如し」と語ったとされる家康の人生観をものがたるエピソードである。家康は、家内繁盛を願う格言としてこれを伝えたかったようだ。そして、この逸話は江戸時代を通してかなり流布していた。家康を祀る久能山東照宮には、根元から三つにわかれた樹齢350年と言われる大木があり、それは「金のなる木」と言われている。

ところが、当然のことではあるが、「金のなる木」を商売繁

盛の格言として捉える人びとが出てくる。たとえば、図1の引き札には、恵比寿と大黒が床の間の飾りを整えている様子が描かれる。大黒は小判がたわわに実る「金のなる木」を植えた鉢に水を差しており、恵比寿は「み」にあるべ木」という木をあらたに鉢に植えようとしている。この木には、「御恩あつ木」「親に孝ふか木」などの幹があり、枝は「こゝろひろ木」「ふ実のな木」などであり、根は「よき正ね」(良き性根)である。まだ若い木で緑が美しいが、鉢には土のかわりに小判が詰まっているので、やがてこの木もたわわに小判を実らせるのだろう。一方、恵比寿の足下には「よくふか木」「なさけな木」が幹になっている「にくむべ木」が切り倒されている。商売繁盛のありがたくもめでたい絵柄である。

引き札とは江戸時代の後期から流行する宣伝用の「チラシ」である。ここに掲載した引き札には左側に、京都市新麩屋町仁王門南にあった「諸油木炭雑貨各種」を扱う池松商店という店の名前が入っている。この店の広告になるわけだが、この部分は別刷りであって、同じ絵柄で他の商店が使った引き札もあったはずだ。この引き札がつくられたのは明治に入ってからであるが、この種の引き札は、江戸時代後期から明治時代にかけて、広告メディアとして作られ続けている。そして、この引き札というメディアには「金のなる木」がいろいろなかたちで用いられる。たとえば、七福神の乗る宝船の帆が「金のなる木」であったり、正月の年始まわりに持ってきた植木鉢に「金のなる木」が植わっていたりというように。家康は、百姓は「生かさぬよう、殺さぬよう」と言ったと伝えられているくらいだから、もちろん人びとが儲けに走ることは否定したかったのだが、なにせ「金のなる木」である。ほとんど、商売繁盛のシンボルのようになっていたことがわかる。

明治32年(1899)に創業された信天堂山田安民薬房は、創業者である山田安民が開発した胃腸薬「胃活」が売れて商売は軌道に乗るが、創業10年後にさらなる飛躍をする。それは、ドイツで学んだ眼科医井上豊太郎が処方した点眼薬



参考図 金のなる木



図1

をロート目薬として売り出したことによる。結果的にはこれが成功して、現在のロート製薬になる。

ここに一枚の縦長の目薬の広告がある(図2)。中心に大きく「金のなる木」の植木鉢がある。しかも、この木は、花の部分が貨幣で葉の部分が紙幣になっている。鉢の部分には「すぐさしてごらん」「井上博士のロート目薬」「山田安民薬房」などが記されている。そして、木の横には「胃病に胃活 泣く児に乳」という山田安民薬房のキャッチコピーも記されている。この広告の最下段には、「大取次」として「松本薬局」とある。現代でもそうだが、会社が広告を作り、それに販売店の情報を刷り込んで広告として流通することになる。

この広告は、われわれにとってありがたいことに、制作年代がわかる。この「金のなる木」にシルクハットに正装した口ひげの男が登って一枚の暦を下げているからだ。これは大正3年(1914)の暦である。暦もまた印刷物として早くから流布するものであるが、その暦と引き札が合体している例も多い。その理由は簡単だ。暦がついていれば、すぐに捨てられることなく、うまく行けば一年間は台所などに貼ってもらえる。もともと引き札は正月に配ることが多かったため、引き札と暦の合体は必然でもあった。

図1として紹介した引き札に比べれば熱気には乏しいが、第一次世界大戦が勃発した年に作られたロート目薬の広告は、引き札からポスターへという新しい時代の広告を予見させるものである。

引き札にしてもポスターにしても、そして、暦にしても、所詮は使い捨てられるものであった。しかし、それが現代に伝存していることにより、われわれは当時の風俗や印刷技術、広告の方法を知ることができる。徳川家康が語った「金のなる

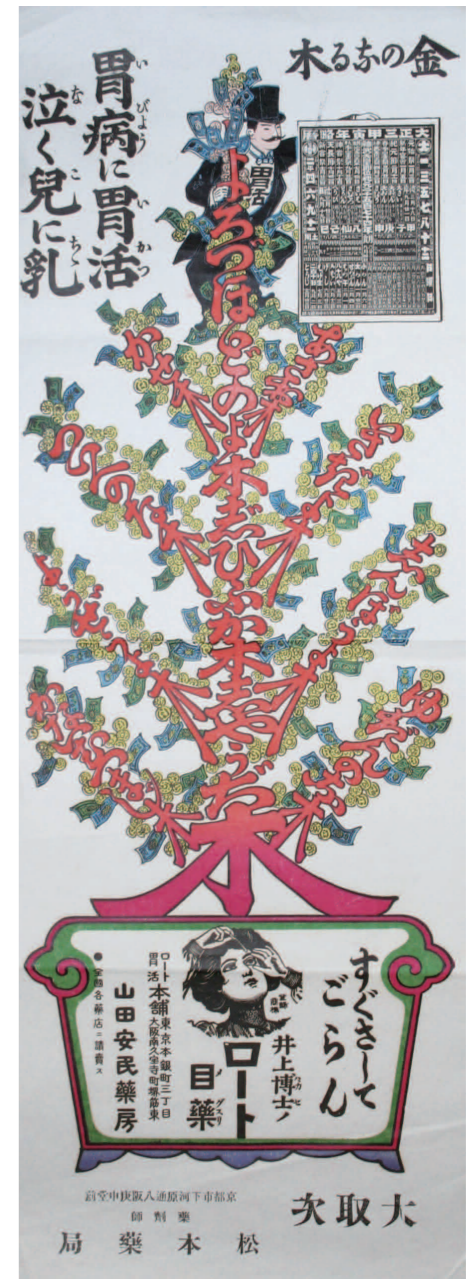


図2

木」が大正時代の新しい薬と結びつく。しかも、小判が小銭や紙幣になって。そんなことを考えながら、いまに伝わったさまざまな広告を見るのも楽しいものだろう。そんな広告やポスターが、昨年度美術工芸資料館の資料として加わった。それを少しずつ紹介していきたい。

美術工芸資料館長 並木 誠士